ハンドボール選手の傷害発生状況と治療動向
―日本のハンドボール界を取り巻く現状とその問題点―

相澤　　徹

武庫川女子大学　文学部健康・スポーツ科学科

日本にハンドボールが導入されたのは約80年前のことである。昭和13年に日本ハンドボール協会が設立され将来に向けたハンドボール発展の土台が形成された。戦後は国際ハンドボール連盟にアジアでいち早く加盟し、日本は競技力、普及ともにアジアのハンドボール先進国として自負していた。しかし近年、国際競技力の面では、オリンピック大会において男子はソウル、女子はモントリオール以来その道を断たれ、低迷を余儀なくされている。それに加えて、トップの競技力を支えてきた日本リーグチームが経済的な問題だけでなく、スポーツに対する考え方の変化もあって、廃部や休部している例も少なくない。普及の面では、少子化、嗜好の多様化による若者のスポーツ離れ、また教員採用の減少による指導者不足などから、登録人口は減少の一途をたどっている。以上のように、日本のハンドボール界は二本柱である競技力と普及で停滞・後退を余儀なくされている。日本協会は世界や日本社会の変動の流れを受けてそれを乗り越える改革を成し遂げなければならないとし、平成13年より、プロジェクト21を立ち上げ21世紀にハンドボールが羽ばたける様その計画を順次策定している。今回、我々はエリートハンドボール選手の傷害発生状況と治療動向を調査し、予防可能な傷害が多発し、かつ受傷選手達が必ずしも正当な治療を受ける事が出来ていない現状を明らかにした。日本のハンドボール界の現状を踏まえその傷害予防と選手達に正当な治療を受けさせるための施策について考える。